「知る」ことの大切さ

沖縄県立向陽高等学校二年　沖田　椿

「蛍を集めれば光になるよ」

これは、おばあちゃんが小学校の時ひいばあちゃんに言われた言葉です。今年八十八歳、米寿のおばあちゃんは、小学校の時戦争を経験しました。おばあちゃんは戦争を経験したことは話しますが、具体的なことを話したことはありませんでした。私たち家族も何となく触れてはいけないようで、触れたことはありませんでした。

私が小学校の時のおばあちゃんのイメージは、「厳しい」一択でした。おばあちゃんは小学校の先生をずっとしていたので、毎年夏休みに私の家に来ると、夏休みの宿題を見てくれていました。今もですが、筆の持ちかた、漢字の書き順など、いつもおばあちゃんに口うるさく注意されます。また、料理を一緒に作る時も、おばあちゃんは野菜の切り方にとてもうるさく、「ヘタもなるべく食べなさい。」と、ヘタも人参の周りの皮も絶対に棄てませんでした。その時、私が怒って「貧乏くさい。」と言ったこと、その時のおばあちゃんの少し寂しそうな苦笑いを今でも鮮明に覚えています。

ある年の慰霊の日、私は初めておばあちゃんの涙を見ました。いつも厳しいおばあちゃんの涙に私はどうしていいかわからず、陰から見守ることしかできませんでした。あとから私の母に「戦争はまだ終わっていないんだよ。」と話していたそうです。泣いていたおばあちゃんがどうしても気になった私は、思い切って話を聞くことにしました。

おばあちゃんから聞く話は、平和学習で行った平和資料館で見たり聞いたりしたものと同じような内容でしたが、身内のおばあちゃんから聞くと全く実感が違いました。芋しか食べられず、その芋も大家族で一本を分け合ったこと、空襲警報のサインが鳴るたび、恐怖の中急いで隠れたこと、ある友達は目の前でおじさんが爆弾でやられたこと、また、別の友達はいじっていた手榴弾が爆発し指を無くしたことなど、驚きが隠せない内容でした。

おばあちゃんは、那覇港から船で七時間ほどの鹿児島県の沖永良部島という島の出身です。沖永良部島は沖縄本島に非常に近く、米軍の上陸こそなかったものの、沖縄と同様に戦時中は米軍の攻撃や食料難や伝染病にとても苦しんだそうです。おばあちゃんは「小学一年生の時、入学式を夜にやったんだ。」と、とても誇らしげに言います。なぜなのか聞いたところ、米軍にバレないためだったそうです。

「木にいる虫が落ちてきて大変だったよー。」

と、今でも嫌そうな顔で話します。また、私が夕方卓上ライトの下で課題をしていると、おばあちゃんは珍しく自分から、「おばあちゃんが小学校の時こんなものなかったから、お母さんに言われて蛍を捕まえて、蒸した芋に生きたまま埋めてあかりにして勉強したんだよ。」と、嫌そうに顔をしかめながらも教えてくれました。おばあちゃんが戦争で亡くなっていたらこの話も聞けなかったんだと、改めて感慨深い思いがしました。

誰もが、調べれば戦争がいつ始まりいつ終わったかは分かると思います。しかし、実際に戦争が終わったと感じるのは人それぞれで私のおばあちゃんのようにまだ終わっていないと感じる人もいます。私は自分の中で、戦争を大きないじめだと捉えています。よく「いじめでできた心の傷は一生残る」と言われていますが、戦争もそうなんだとおばあちゃんの話を聞いて思いました。私はおばあちゃんの話を聞くまで、身近な沖縄の話を、昔話、悪く言えばおとぎ話感覚で聞いていたことに気づきました。いろんな資料を読んでもどこか現実的ではないため、こんなこともあったんだという、まるで他人事のような感情もありました。私のような感覚がきっと戦争を知らない世代には少なからずあると思います。でも私たちが変わらなければ、戦争の本当の恐ろしさ、愚かさは伝わらないし、いじめと同じようにいつでもどこでも起こりうるものだと思います。よく歴史の先生が、「歴史は過去の過ちを繰り返さないために学ぶんだ。」と言っていますが、本当にその通りだと胸が熱くなりました。

おばあちゃんが食べ物を粗末にしないのは戦時中のひもじい思いを知っているからだし、色々なことに厳しいのは、戦後貧しい中でおばあちゃん自身がちゃんと教えてもらえなかったことを私たちに教えているだけなんだということも気づきました。これからは私も、おばあちゃんの話と共に、「戦争を繰り返さない」という意志を自分の子どもや孫に受け継いでいきたいです。